

水の雫

水沢朱実

朝イチで朝の検温が終わってから、
思い切りよくカーテンを開けて、
窓を開け放つてみた。

ひんやりとした空気が入ってくる。

10月半ばの朝の冷気は優しい。

ひんやりした中にも、どこかしらに温かさが入り混じっている。

以前は。

カーテンを開くことすら怖くて、
カーテンを閉め切り、暗い病室で一人、布団をかぶって、ふるえていた。

あれから一か月半。

病気が徐々に回復に向かうにつれ、
私の中で、とても静かに、「今の私」が腑に落ちた。

何と言えはいいのだろう。

真っ暗な中で、水の一滴がぼつんと落ちて、
下の水面に波紋を広げる。

とても静かに、ひとつ、・・・またひとつ。
暗闇の中で、水だけが、確かに淡い光を放っている。

——ああ。

私は、水に生かされている。

線香

水沢朱実

母が亡くなって、もう3年になるだろうか。

毎朝、毎夜、三本ずつの線香を捧げる、我が家の線香は消費が速い。

多分、他のうちからはありえないスピードで、我が家の線香はなくなっていくはずだ。

時々、いただきものの焼き菓子なんかを、お供えする。

「おいしい?」

返ってくる声はないけれど、何となく、深呼吸がしたくなる。

「ありがとね」

私は母に呼びかける。

仏間がある、リビングの部屋は、今の季節、ずっとエアコンが点けっぱなしだ。部屋はきつと乾燥してるに違いないのだけど、

私は、仏間のお水の減りを、何となく、「母のせい」にしてしまう。

「お水、飲んでるね」

そう呼び掛けたい、これは私のワガママだ。

「また、お掃除しないとね」

アミのスプーンで、線香のツボの線香の燃え残りをかき出す。

ティッシュの上に見える、線香の山は、私の供えた線香の数に他ならない。

「できたてだよ」

いつものように、三本の線香に火をつけ、仏間に立つ。

「今日もありがとね・・・お母さん」

窓の外には、今日も青空が広がっている。

命の水

水沢朱実

水を、呼吸する。

これは夢なのだ、ぼんやり自覚しながら。

私は魚になり、イルカになり、クジラになり、ただ泳ぎ続ける。

空気のように、水が肺を支配し、

耳には聴こえない音を、立てる。

人の身なら、絶対に聴こえないはずのその音を、

私は

水を呼吸し、

音を呼吸し、

母なる海を呼吸する。

大きくのびをして、

私は人の姿を取り戻す。

優しい水の温かさが、身体に絡みつく。

「お別れだね、でも、また「あなた」に会いに来るから。」

身を翻し、

私は

人の世界へと帰っていく。